

東

御神靈
感得奇聞

新田義統功臣錄第二輯卷之三

討得奸吏受奉爵誥

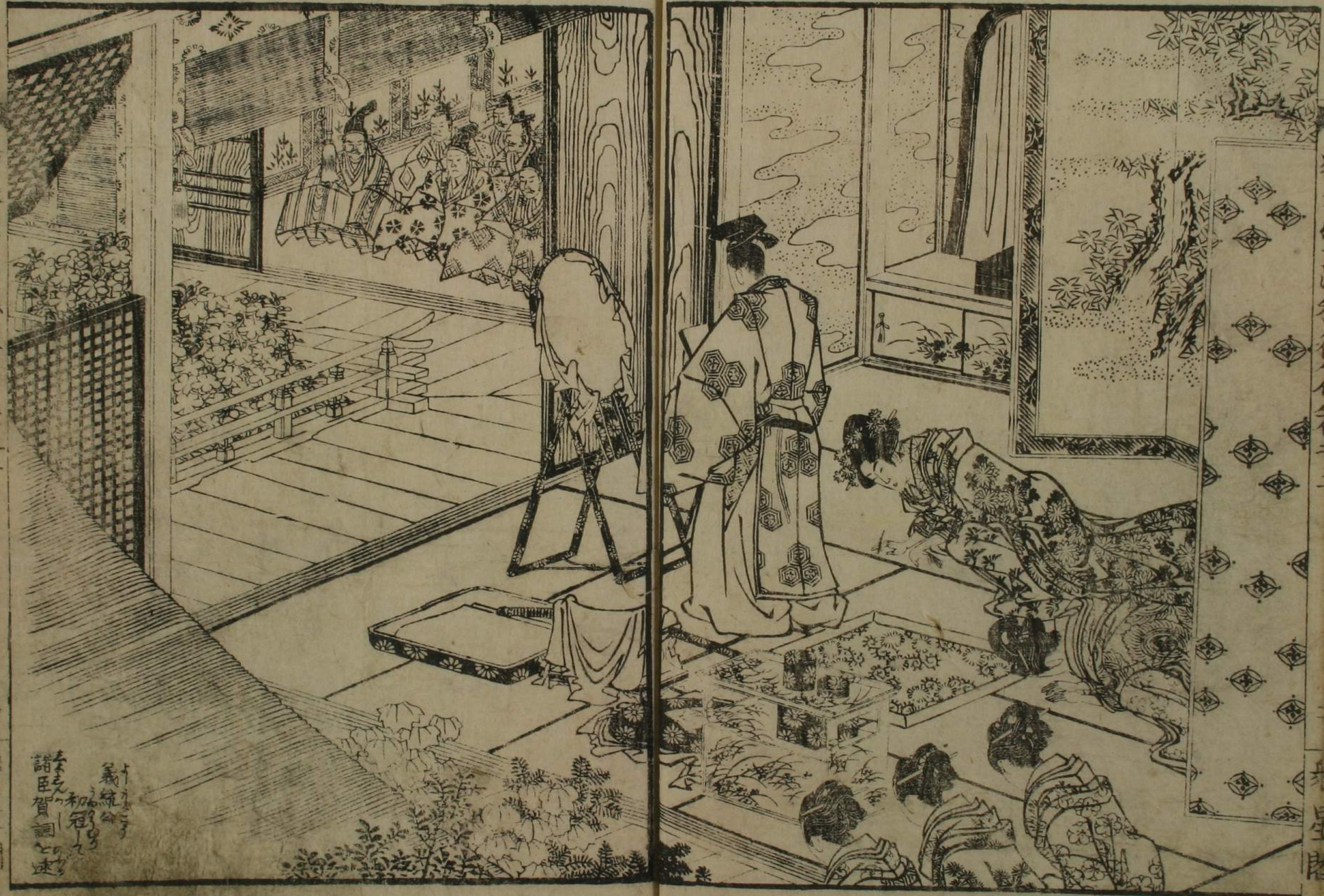
懸心戀原夫絶恩愛話

於
20
8

且説這時德壽丸の府中全く陥入多ひければ、ざら火をうら満じ
ち多ひく、后兵司よ後堂を治むべの旨を命とれば、兵司かこみ
かぐて後堂ふら入着るに、禪可が渾家刀根兎と自殺し、あり
たれあぞ、夫よの似げく、けあまなれを憐れ、厚く収殮且嘆纏る
侍婢ホ奴諭し、は我君仁慈のほ意ふり、在すや、少も人を
害すふとなし。まんと想ふ、そのの親のりて返す。と、まらんとおられ
そのの柱居く撫恤多し、も、なきて慌忙となられと云りけり。ま
みる心を易し、喜ひたり。粵ふ玉琴と、前日禪可が鳥ふらぬ

入會本堂各惠後まらぬ

三三三



新編日本書紀卷之三十三

義経
初冠
諸臣賀詞七

新編日本書紀卷之三十三

義経

かへ叶はまじとめて軍を動さの沙汰の中のみ。只顧民を富むの術を
倣しあふむとよ一國咸其仁惠不暇一昇平をもて唱えり。義統公の
時ども少しも奢るるで只軍器のゆふのこ心を悉く孫呉の書に
なり。彼紫花真人より受得されぬの奇書よりて多かれ陣營は布
夢あひまひ。然時も怠りなく励精多ひり。時とや仲秋の天ふなり
二日の宵月の隈ありてやうかたけをふく。義統公より南面の
かびらうらふ出多ひ月の光不書と続くとしけり。あやうふ公の
あひこれ。一盞茶時書を讀はし。庭面を眺めり。あは四季の望
くさくされぬ中。物のなきと秋ふもくはなく。峯の楓は紅なり。糧
くさりのむね。離の菊の紅白。突く香む。いんふ。千草は。嚙く虫の
憐しさを。流るる。あれを。雲井を。さる。雁と。愁ひを増し。是凡秋の景物

マ

あしをいぼれ甲乙なく飽ぬ物か。悠然負着おちる。此折し
玉琴を月のゆきさなるに。乗ド。おの。国。な。れ。出。此。處。す。て。り。は
離の際より空をひらる。清らう。し。王の。て。れ。少年の。端。近。至。て。月
を望む。あり。れ。あ。ぞ。誰。り。あ。や。と。瞳。を。定。め。く。着。一。着。ふ。義。統。公
小して世不類な。艷や。な。れ。容。貌。ふ。在。せ。ば。素。より。好。色。の。玉。琴。忽。ち。これ
を。愛。大。く。悔。る。想。へ。ら。此。人。斯。く。り。清。ら。う。あ。る。べ。し。思。へ。り。れ。か
ら。ん。て。奴。預。く。知。り。ら。ば。あ。ら。う。て。嫁。や。替。わ。さ。う。と。挿。り。よ。春。心。動。さ。う。ゆ。は
く。云。寄。ん。ん。の。を。と。多。方。か。沈。思。さ。れ。が。屹。と。一。箇。の。謀。を。思。ひ。出。離。の
下。あ。ま。り。て。さ。め。ぐ。と。う。ら。嘆。け。義。統。公。偶。れ。を。青。き。あ。小。齡。少。く。美
貌。なる。女。の。站。く。泣。居。ら。う。あ。ぞ。甚。怪。し。と。多。ひ。と。何。等。人。の。女。兒。は。して。何。ぞ
嘆。ち。ら。あ。と。と。坐。小。憐。し。多。ひ。これ。孤。引。く。席。ふ。ら。あ。その。末。由。を。問。を

一室の紙門あらうふ用と踊ちり玉琴が髪を捉へ撲地牽けし拳を揚
 る乱打そのあり義統公伊夫妻驚ひてこれをほら流さるる則是莊輔
 たりけれハ負見急小柱りんとするを莊輔声を揚くすむ洒家えつれを
 せうせ多く是中が今日の光景を彼所ふありて詳小知り我思あがも
 かどうり姫邪なれりのたうぐん知りて養育を切齒られいふ玉琴
 汝がさうなれぬ心あ常言のどく牛の角を蜂のさせたる均かぐれ
 どいハて殺さんも使うさふ云へるどしと怒の涙を拂つ云我父頭家卿ハ
 南朝柱石の臣とし君の侍はる世の用ひも他ハ異ハ在りせし時
 の運と云なう軍陳ふ余を汲しひり其時我もその場ハ馳往
 討死とく既ふ是悟と極めし事の後あれハ死さぬもはしあ
 且ハ汝ハ切なう父ハ離れハ何等憂く逢ハも不便く恥を忍て

惜かぬ命とあう我年の老ぬも想ひて一日もや成人ハ良塔を
 索め榮ゆく未だ着やと想ふ折々徳壽丸の此國ふまらせむひれ
 これぞ好と配偏ありと既ハ詩字と倣ね親をかどうり想つれ
 いう年記若しとハ義統公のた仮初ハ病を厭ひこれと辞
 ひのこ焼太と私通して彼が妻となりたれ人ハ不義の云べきあ
 彼死すいづれども今又原夫を慕ひあハぬ空言をりて父ハ罪
 負し事不孝とや云ん不義とやいん想ハ汝ハ肉を食やも
 尚飽くじと得小腰刀ハ抜く刺んとすれを負見才とり是
 を遮り柱め多方ハ云託ともさうに耳くことなりあう怒
 一増す事十分ハ危うかりられあそ其過失あハんハ心懼玉琴
 をてらと走しむ小莊輔尚とれを逐んとすれハ負見固牛と



繪本不詳名合懐心



月
不
寐
今
玉
琴
春
心
不
傾
心

繪本不詳名合懐心

七
身
思
一
階

なりて關止うち。外の方不逃と出すが終小其去向と知れどもわたりなり
嗚呼這玉琴奈何あれが如斯不孝ふまぢやれ畢竟是甚の報ひ
ある。下回小解と聽不在話下這裡新田の舊臣條塚伊賀守を
勇名四海小轟。豪傑なりしが故義貞公失あひく后々大體
九馬助復事しうとこれもやうと伊豫國世田の城よおかて下世なり
ある。世の無常と感同國今張の浦より舟小乘隱岐國小渡海
し終小叔氏の徒とたり。石虎法師と名號なり。原武門ふあつ
て勝とされ勇夫なりが今仏門ふ入くも進む公のきめとある。あつ
有る行を勉げらむと名僧のすへある僧も尚及ぶる事なむも多
かり。斯叔氏の業と做得。誓く無事しとあり。孰とあふ
小その昔武門ありし時數度の軍陣小臨。我許りの人の命

どりのなむ。後世のほども恐ろしく且義貞公初め其餘の人これ
追福の爲ふもあれ。是より諸國の名山靈場を巡りて是す。これ
罪と滅さんと暴お四國を旅発して都の方赴り。往く山城。其國
大井川の邊お至り。此當時前小説話とれ外竹林了庵の
姪めを女と騙と首締を命を示さんと失り。如くおより女を驚た
頓小子瓜産との所を立退。後小御人ホこれを着く。この老法師
の此兒と産りれ。あう世お稀有くもある。その哉には順く。これ怪み
懼とく子と養ふといわぬのやれを石虎法師傳人。頻りお哀れと
農夫の愚申して理を解と。怪しげあること。をいひ。得難と人
生と。この瓜空し。見殺と。死と。不便想ひ御人小ち。く已せ
これを懐お抱と。松街化育乳ある。人の門を。只願お乳

會大徳寺...

し一皮...

賞ひくまはけいどふ御人も法師の力ゆく。嬰兒を助保とてを奇特
 かゝるの思想ひともよ力を助るれば想つるも公易とて育たり光陽
 のこ易とハ隙ゆく駒のどく斯くあることとやも五年を経く。この兒
 五歳ふとふはれりけり。幼名の拵松と叫べり其性伶俐はし。事とて
 ろいと成童のどく石虎法師と慕ふてふ父母のどくはれり石虎も
 こふ愛撫恤ぬ然る拵松幼けり生平小御の童子と嬉戯せられ
 小那件那色もつれま父母のありて樂しげに撒痴嬌光景を着く甚
 ろいを吾父母のりたを誂て一日石虎法師お對ひく云らく。いふお師の
 坊よ他の童子もはるや父母といふものおしめられ五才のこはれ何と
 志はるてらおとご。そと聞くとハ石虎のいふ童子が才あふ多方の説話あれ
 い幼れば是れ其縁故を云はせてこや。今異し同よりて詳不

説話なり。成童なりある父母の現世後世の爲あれは必半僧となり
 因果の罪と滅とべりと五年の前大井川の邊あり拾ひとり有枝
 有葉を細的説且云らく唐の男子の子と産めりしと云あれ人これ
 童子も其類なり人と想ふも。夫を理を解きまはなり。童子も必と
 父母のありぬるれど世にたらが縁故あり。産とてのまき并しとの
 人。あえあれ其時の遺書お死せしのはあれは恐らく母の死ありやし
 人とうち涙ぐとて云はれ拵松じやと吾身のうを切心し何と
 う想ひん頻お落涙しけれ。それよりしこ公もられや。益となく夜と
 ろ。寂寥まふくハ只顧嘆れ悲し。漸く小羸瘦あど石虎法師此光
 景を着く。その父母と慕ふ志を憐し。いふおしこ父母お遣せまら
 小思惟こふ此兒が親も必と此邑近なり。と量りられを



石虎 説法 の 高標 と 建子

石虎 説法 の 高標 と 建子

一箇の計策を想ひ出し、暮ら遠近の街に高牌をかり、某月某日我々庵
 小あかりに法講會を催すの事を告示し、此年頃天下の騷
 まより、絶く其事のなかり、近頃少く世の中静謐ありし折から
 けんぱ、此高牌を着る。甚りぐらうり、事よと口煩はるほど、その目
 あもつりし、遠近より會ひ、群集をなす。做すあり。

石虎説法 推梵情話

群蛙作鬪 激義心話

且説這時石虎法師と人々の會ひ、聚るを着、預く設け置、
 高座に上り、佛經の香をたき、右説左説、且多方の因果説話
 して、終に拵松を側置、云へり、此の世に死摸活様の悲し、此
 のありと、此の切き、此の憐し、此の貧道五年の、前此

地方へ技を曳られ、大井川の邊に童子の并ありし、折や、其
 傍に法師の溢死あり、ありは、人々法師が産子よと云ひ
 て、其怪しむ、それを忌む、忌むと、いふものなく、あつり不便
 なる。貧道これをも、養育、今年五、五、此を、物の
 心も、世間の光景、此の童子の皆、父母のありて、これ
 姑息の貫を、着る、びびり、歎、貧道、對ひて、
 あり、他の童子、あり、父母の、我、の、わ、
 師の、坊の、見、や、あれ、され、師の、坊、坊、男、あ、
 母君の、お、い、な、つ、と、泣、悲、し、み、夜、も、眼、と、合、
 と、夾、七、夾、八、小、さ、し、慰、し、む、う、い、た、聞、
 小、あ、れ、な、つ、の、此、乳、房、を、搜、り、て、泣、寐、り、
 哀、と、云、今、の、

方と知ろしめさば願くは教へるせま只一目あもあれたる事瓜得
む今より老實と物移りもせと他の童と鬪争ももとはし且
そのうへお灸もあふとしくさゆたふいうもしと母人と此処お誘ひ
よくと口説くところ嘆けは女親へたゞ正殿もなぐ泣くお涙お咽
び、困りたるが漸かくお面を上げ泣眼を拂ひ掃松が脊梁を垂坐
るりのり口れの童子の親が慕ひもる理迫く憐れおへひ他人
の遠より坐お涙あかすられとどばすわて産の親はすもひなげ
いうむりう嘆きもあふめ斯至孝の月へる皇天の照覽いあへばとく
母人の知るてもあふらめど世より難と縁故あればこそ愛児お告名
對面をせざるなられへ其心のうちとこと苦う哀れかゞ思精とて
む心乎難面母とどし眼もまよる尼り其人お博會とを得ハ詳お

のひすゆたわらふととも此世の對面と叶もぬとくあきひめと
師父を父とも母ともんむひ宣ふことお乖かては侍の傍わの経
をお回へ成人たうらなは好き緇徒とあり世お聽や何どの徳と顯
親教師の御名と汚しあふる且一面わの童子と拵し父母の無罪障の
深くんたふ因縁と薄き親あがら血属のきれけき此人の後世
の爲追摩回向をなすあへと嘆咽て云へふぞ拵松原委園とち
よりも尼媪が顔のそを着右着涙おくれとあり泣け言葉の終も
吾声お放つと泣く云とらうとも頼り想ひ糸をせらる小甲斐
なれとて涙けあふる甚力お哀あうなうてゆぞ只今宣ひ何どの
こととぞ辨ふぞれど親教師わの乳房しやのなうておをむなる
何とぞ母と見えたりと見え尼公の優恤のこと命をれ何と



糸本壁三流秘伝巻之三

十四 舞臺

中母之のぞく小想をれく。慕のしつ小今より童子が母人となりて
 ありし。さきしつあらん後あらん宣ふとも乗ゆ。且そのうふ好つせ
 あり急ぐ。御経をもよおしく朝夕讀む。やえ糸のせんもふ何
 りとも堪へて。おおをせよせめて。一日なりと世間の童子のごとく
 母人小肩もち抱もち夜尚乳房とやと搜り寐む。里の童子と
 遊ぶも母あれ見よとの咬味は。哀憐あり。尼公とりひく泣口説く
 と纏もれは。いとを嘆きたり。此時尼媪も諸俱小涙小咽んぐあり
 ぐ。堪へるもやあらん。拵松ととく膝小抱き声戦りて云り
 ちるは。あま最愛の童子よ。りけり。幼小難面母と恨こもせむ
 他人の此方とかならん。小意ひ優恤のそ云ふ。あれは。奈何もして
 此處小居り。朝夕の女保とせむ。想ても。尼が。年老くと云

小もあふ。祇の。這宝庵小居んこと。世の父一人の誹謗もいっあれが。
 又此も叶ふ。賢れ。小此道理と辨く。少小想ひと断々
 とらふ。拵松と呼とむ。り小泣臥して。絶え。哭きしが。良ありて
 石虎法師の袂あも。尼公のあ。のぞく難面。宣ふ。る。小
 ふうと。し。お。あ。央告して。親教師と涕泣して。嘆き
 ぐ。石虎法師も。双眼と緊流。嗚呼。道理なり。童子我あ。せ。べき
 旨あれ。い。く。お。き。これ。返。誑誘つ。女。小。對ひ。い。せ。小。難
 面。小。の。も。多。り。ん。ど。尼。媪。り。ど。心。強。人。の。あ。じ。前。刻。より。窺ひ。る。る
 小。此。児。が。面。貌。尼。媪。より。似。ま。る。を。お。き。く。ば。正。ち。母。親。あ。る。べ。た。は
 か。む。る。と。泣。慕。小。見。と。着。あ。が。ら。な。ど。深。く。包。こ。め。あ。が。ら。は。り。言
 葉。小。文。して。偽。り。あり。是。則。佛。の。戒。し。あ。あ。な。れ。母。語。る。且。れ

うまかろくことあり必定此見の戀慕死を做せたり。是殺生戒と
 破ふありや。佛も一子あり。我國の淨藏々二人の子ありしこと。こを尼
 媪のこわいあり。昔より懺悔の幾許の罪と威をこわたりたり。こ
 赤心と明し此切見の志と遂にあり。千萬の経多羅尼と読んより。這
 小勝也。功德あり。道理を尽して説く。女親の道理をせられ。只顧
 涙の暮多羅。一盃茶時と云ら。嗚呼迷ひぬ。今日も母の白疾一
 心小一上親門に入り。再び恩念の騎ひひき。素より罪障
 深き女の身の。仏果の得ざん哀々。深く又ひひか。只いよ親
 教師の難有。教化と冥迷の雲の暗き。真智の月澄をぐりぬれ。む
 取し。身のほど。明白告げ。や。拵松よ。慕ひぬ。母の
 則ち。今より。幻の及ぶ。限り。介保して。死す。是も。

難面りし。そのい。してよ。と。又抱き。拵松の。只これ。夢。を。り。嬉
 し。さ。て。い。尼。公。の。童。子。の。母。う。い。ゆ。し。り。り。ぬ。や。か。ど。老。早。小
 も。名。告。り。あ。い。が。れ。が。今。より。の。終。久。も。う。ふ。お。せ。と。抱。摺。り。離。さ。べ
 う。い。着。へ。ざ。り。ち。ち。良。あり。て。尼。媪。と。涙。と。拂。つ。て。云。り。り。り。甚。恥。じ。く
 浅。様。き。が。あ。い。あれ。ど。親。教師。の。命。子。随。ひ。残。り。ず。の。さ。ぶ。懺。悔。一
 侍。を。危。し。奴。家。の。素。急。岩。々。邊。り。り。農。夫。牛。六。と。叫。做。的。の。女。少。て。
 名。と。百。合。と。い。び。ぬ。幼。り。に。より。血。屑。の。うち。り。馬。太。郎。と。い。え。る
 カ。の。を。サ。塔。と。做。る。に。の。と。約。と。せ。る。に。定。ま。る。世。の。中。乃
 習。あり。母。あり。り。人。た。初。の。病。ふ。り。の。ひ。た。り。漸。と。小。重。り。終
 かつ。た。り。ち。ち。あり。り。此。時。奴。家。十。歳。あり。物。の。心。も。母。と。母
 又。別。世。の。哀。々。ゆ。く。の。嘆。小。甚。白。痴。く。あり。ぬ。れ。を。老。爺。

新編浮城録行傳卷之三

十六 卷三 尾

も思ひひひ。かくの如き幼女児と男の由而已少く養育してらんぬ
 女の道は疎く不良事も多かるべし。其年京師より公卿方
 けり。うち某なる人の力にて仕事小出ありぬ。其処の在りて七年
 返強りて。漸く成長なりける。主翁奴家小懸想して辱し挑
 しか。素より許字ある。此方あれば堅くこれを拒みぬ。いとも只顧
 切なる想ひの程を云はせぬ。主の言を聴くぬ。やあるまじの
 理と多方小宣えぬ。小固辭かく。あつたけ契紙結び。終小只
 めぬ。才とちれ。己を。初のほどりかく包て陰に居れども。月々重
 める小ま。く。大や小腹のよ。を。院君の性妬。く。この光
 景と察知く。腹たじ。罵りあへるほど。主翁も没理。會。密小
 奴家小袋。両の金とたび。故郷の父と呼び。縁故と告。申へ。暇とあり

これらうちけられ立。飯。道。と。から。老爺の宣。つ。あ。お。こ。て。今。こ。そ。七
 景。あ。く。家。小。飯。ら。六。替。馬。太。郎。が。怪。し。は。ん。も。心。憂。し。こ。は。忘。せ。ん。と。か。て
 苦。し。あ。ま。を。着。く。に。み。び。と。心。裡。お。想。く。ら。く。な。く。小。奴。家。が。貧。乏
 居。る。ば。こ。も。左。袖。右。袖。煩。ひ。多。る。れ。が。索。性。死。人。小。志。く。ま。じ。と。道。へ。走
 了。大。井。川。小。身。を。洗。め。ん。と。と。折。ら。一。個。の。老。法。師。を。り。て。奴。家。の。死。ん
 と。と。を。柱。と。い。ひ。小。川。水。洗。め。て。死。す。と。こ。と。叶。し。の。斯。く。て。死。な。せ
 る。と。て。縊。り。し。る。似。と。做。け。る。あ。何。と。し。ん。過。つ。と。誠。お。猛。り。て。死。失
 ぬ。其。時。に。傍。に。た。れ。樹。梢。あ。て。嗚。呼。燥。脾。胃。と。怪。し。け。る。声。の。耳。え
 る。あ。ぞ。咳。然。と。嘔。的。暴。小。産。の。氣。げ。ひ。易。ら。げ。り。也。這。童。子。や
 産。ぶ。い。し。が。其。後。心。も。死。も。恙。な。の。り。し。と。一。回。死。ん。と。想。ひ。こ。も。れ。ば
 深。と。測。を。索。め。く。身。を。洗。め。ん。と。岸。小。添。り。て。歩。む。處。へ。老。爺。の。尋。り

身多し是非を問ひ強く俱ひ晒り多し其夜主翁小貫ひ一金を
 父小進より取馬太郎蜜ふとれを窺ひ着られ預く貪欲るれ性
 られば深更ふ及び其金を盗取んと志ししを父と馬太郎とふ
 こゝ偷見の入りとて心得とれを逐し何と志らん二人とも古井に
 小陥して遂に死失なりとづる奴家此時いふとも没理會只頓嘆死
 とあり多れを近邊りの人々集り多方小云誤り斯くも果るに
 小雨しと二人の屍を葬埋してかとはり多れ過度と當ひ折る京
 師ある主家此頃兵乱の爲一家悉く亡びぬと誓ふ聞へるあそ
 悲しみのうへ小愁ひを聞心も乱るる哀しく俱ひ死ねるは
 ぼるが熟く思ひ惟と小是渾前世の作業ありはるる今此
 悪報と果るあそあるらん若此すはして死んぬ父母をば其餘

の人よりしく我身の罪障と誰か消滅せよと惜かりぬ命を子ガ
 之斯い形容と革とるぬ涙とも説話とが石虎法師熟く
 うち涙を拂ひ仏号と念して云尼媪の者のうへ小憐れらるる
 ゆひぬがさるも菩提の道入りぬれば多くの罪と滅しありより今
 日不図拵れ我子おれり遭るも此渾仏の方便小とれるものあん
 今より此兒と好養いあり説話ありなれば拵松成人ありなれば
 僧と做り一子出家せれば九族天小生ると云れば是れ小過り
 ちあじ貧道又原来ぬ願ありく諸國の名山靈場小詣んと
 せりくと此童子が爲小遊られ宿志を空しくせんと志せし今日尼
 媪小遭り此子を返して与てれば一日も滞留なれ小あむ明日早
 東州の方よりあむれば名残を惜しめんと法衣の袖と濕とせり

小百合尼母子の甚之趣こそ小想ひ。多可く惜ことむらち小も。栞松
 々日頃意慕ひぬる。母の今日漸や對面はせぬこそ成得く。喜ひの
 涙のまじ乾りかぬ。今又厚恩の師と別れんとす。此の悲しきれ涙り
 かさくれて。声もふたて得む法衣の袂に纏まれば。泣き涙も柱むれば。
 石虎法師もさき小岩木あり。祿に其切なれ。嘆きふ心ひりれ。志がく。
 旅発のことと急りや。かたはれとわづらひありけれ。光陰のさやをれに梭
 のごとく。つらつら其年も暮る。山笑ふ春となり。わ啼せし鶯の声もか
 かまらぬ。さきゆめぬ。石虎と驚き我より。これこそ小遮られ斯く。つら
 小月日とるこそ。本意ありねと。這回々小百合尼母子の忍び。蜜小這
 と立出く都と。けし。赴きあり。時の如月のまつ。つ。は。天も長雨。小萬山
 の霞濃く。わ。ねが。裡。の。柳。櫻。の。こ。ま。交。ら。ひ。つ。れ。光。景。の。實。も。都。の。春。れ

錦かりり。つら。と。坐。は。花。わ。ら。ん。遠。近。と。遊。覽。し。つ。れ。日。井。手。の。邑。成。過
 られ。小。名。あ。し。む。棟。棠。の。名。所。あ。し。玉。川。の。流。と。挾。に。双。岸。に。棟。棠
 爛漫と咲。いと香氣。馥郁と。花の黄金色。なるは。と。や。千金の春。れ
 ら。つ。ら。り。け。れ。と。む。ら。り。と。少。刻。眺。望。う。ら。ふ。傍。に。棟。棠。の。茂。み。が
 下。の。や。く。と。音。の。や。均。し。く。さ。や。つ。ら。れ。虫。の。か。さ。り。も。な。く。と。わ。せ。り。又
 ひ。ひ。の。叢。より。大。や。つ。ら。る。虫。の。数。も。ま。よ。り。と。ひ。び。き。あ。ぞ。こ。の。さ。し。の。な。み
 よ。と。着。れ。う。ら。ふ。双。方。より。あ。く。と。か。近。け。さ。の。ち。小。八。至。小。念。あ。ひ。け
 り。れ。を。そ。れ。と。并。け。と。一。盃。桑。時。が。う。ち。着。と。と。り。し。が。叢。より
 出。れ。虫。の。形。も。殺。も。増。し。る。ふ。り。て。や。棟。棠。の。根。より。出。れ。虫。も。み。る
 う。ら。負。く。遠。る。澤。辺。の。方。に。逃。去。ぬ。物。も。其。中。より。一。隻。の。虫。と。ん。く。返
 く。争。ひ。し。猛。多。く。れ。虫。が。食。ひ。殺。し。高。速。行。虫。の。聲。より。飛。蒐。つ。く。と



繪本
卷之三

七
八
九



繪本
卷之三

十
十一
十二

食殺るゝも終ほふ。たゞめ逃行し虫もこれいかや得たりけん。皆一殺の
返せば、さしにも猛き大やうな虫も遂に叶はうち負く。水の中叢の
裡に逃失るゝあをさやうな虫も意氣十かゝる光景ありとつふ
小會ひ集。幾回か声と揚寛くし。原の棟棠の根小取見しとつふ
勇ましくもあつちちち着るれば、石虎法師もと撲地と拍く。大ま小
感激し。奇なるうかゝる川々の虫も斯勇畧あはれなるに
我人間としく何ぞ空しく。浮屠氏よりて天年と終る。今の虫の有様
當世小譬のれ。王家の新田とさやうなり蛙のこゝ微勢あれども踏
さざりし虫のこゝに勇義の臣あらん。あゝ運を開くをやあへん。我
不肖としくも。嫡家義興公の小衙内。徳壽君御よりたゞ再び新田氏
とせめあつちちけん。聞あつちく越王の怒りも毒を着く。勇士の志氣ありと

これ小軼。然小呉と亡がせ。例もあれが只今の虫が有様と。大宿志心
想ひし吉兆ありと獨喜び。さし堅固小行ひはし。道公忽地
轉。形容法衣と纏へども心の昔小取。徳壽丸小見くと華あり
といふ都を旅発。鳥が啼く吾妻路へ。急ぐこゝを赴り。畢竟
這石虎法師。東圃小届く甚事。下回分解。却説這裡。
小百合尼母子。石虎法師の密母此地と。と恨。我もつちし
秋氏の徒るれば。諸俱小名山靈場。諸も。何苦。若う遭
と告あつちを難面。此人の彼人の跡と慕ひ往く。若う遭
そあつちの。此時を幸ひなれ。諸國の諸仙。詣く後世の事故
祈らんと。猛らんと旅発。甚處も。石虎此
いひけん。吾妻の方とありはると便し。甚雄しくも。拵松と誘ひ

園の東下りも有り。日救院をわど小武藏と下総との境なる墨木小
 五徑過ぬ。白川の関ありぬども都より霞も出しかど。女の身は
 りく。幼児を懐いて。もろけき道より諸寺諸山の詣りたり。小
 此時もや仲秋の天のなかりたり。秋の日のけやも早くも天色暮ると
 紅輪西小墜玉免東小昇人も。只聽晚鐘横雲小御音と。遙小
 眺ら宿路鷹汀小下る。實黄昏光景ハ。寂寥して憐れあり。
 斯又しく早く宿りと索んと。四方と着鏡は忽地一軒の白屋ありと
 ちゆゆを。急ぎ其門邊小往り。裡のやと窺ふ。家のわり清ら
 かりて何とやん心ゆくあり。奥の方小茶室に。仏音甚きあり。小
 突へこれむ。かた都の此業のありたり。一盃茶時終り有けり
 小。裡より一個の了髪出せあり。小百合尼これ着て問ふ。此家ハ

流るへ何等人は在りて何の業ともしり。了髪茶を。奴家主翁
 と女あり。生平は系竹の道と人お侍。且二百人の旅人小宿りと貸玉
 あり。とりて生業とあり。小百合尼喜んで云。是好き方おはしり
 あひね。尼温と都のりかかれ。東国の方小幹夏ありてまうり。付れ
 今日しも日暮く宿るべた。方かく十分悩む。憐れ奴家母子一夜お
 宿り。成惠とあり。ぬも。聞へた。とあり。了髪心を得て。家裡
 入り。暫時ありて。又出来く。云。命の音を。主あり。小百合尼の
 りたり。老早俱ひ。せとのりかかれ。い。せ。人。と小百合尼母子と。幸
 く。柴門の裡小入あり。



新田義統功臣録第二輯卷之三終

